

## 理想的な英語教師像に関する実証的研究 (2)

—PM理論を用いての生徒の学力差による構造比較—

保坂芳男

(2004年9月30日受理)

An Empirical Study on Outstanding English Teachers in High Schools

—PM Theory and High School Students' Achievement—

Yoshio HOSAKA

The objective of this research is to clarify, in an empirical manner, what outstanding high school English teachers are like. Firstly, 167 data samples were collected from students of an average academic level high school, by using the questionnaire on a 5-point Likert scale. An exploratory factor analysis yielded six important factors. They are as follows: teachers who give good lessons to make sure students will pass entrance exams, who are knowledgeable and cultured, who give student-centered lessons, who treat students with counseling mind, who are strict on students in class, but can improve their achievement of English and who speak English fluently.

Secondly, covariance structure analysis was conducted to clarify what kinds of latent variables existed and how much they influenced these six factors. The categorization of these six factors was also conducted in order to ascertain whether PM theory would fit in this research or not. The result of path analysis showed that generally these six factors should be divided into two categories: one is very similar to performance function (P Function) and the other is similar to maintenance function (M Function) as stated by Misumi (1978). Next, the comparison of path analysis was conducted between upper level and lower level students. After analyzing the data of lower level students, apparently they demand that outstanding English teachers should improve their students' proficiency in English with counseling mind, and give explicit instructions to their students.

On the other hand, upper level students prefer English teachers with characteristics in performance function category.

Key words : PM theory, high school students, covariance structure analysis, outstanding English teachers, streaming

キーワード : PM理論, 高校生, 共分散構造分析, 優秀な英語教師, 習熟度別授業

### はじめに

文部科学省は、2001年1月に「21世紀教育新生プラン」なるものを発表した。その中の政策課題の1つ

本論文は、課程博士論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員による審査を受けた。

審査委員：小篠敏明（主任指導教官）、三浦省五、中尾佳行、森 敏昭、縫部義憲（教育学研究科）

は、「教師の意欲や努力が報われ評価される体制をつくる」ということである。その具体策として推進されているのが、教員評価、10年経験者研修や指導力不足教員の認定である。

一方で、最近急激に普及しているのが少人数指導、習熟度別指導である。習熟度別指導は、2000年12月の教育改革国民会議で言及され、前出の「21世紀教育新生プラン」において、「少人数指導の実施、習熟度別学習の推進」が提案された。2003年の文部科学

省の調査によると中学校の66.9%が習熟度別指導を実施しており、以前が希だったことを考えるとまさに爆発的な普及である(佐藤:2004)。

こういった一連の教育政策を考えると今ほど、教師の指導力に関心が向けられている時期はないであろう。教師の指導力とは何か、習熟度別授業をやる際に成績上位群と下位群の生徒には教師としてどう接するべきなのか等の問題は教育現場の教師にとっては重要かつ緊急を要する問題であるように思われる。

しかしながら、英語教員に限ってみても、金谷(1995)や保坂(2004a)が述べているように、その指導力に関する実証的な研究はほとんど見られないのが現実である。そこで、本研究では、学習の主体者である生徒が考える、英語教師の指導力の構造を明らかにしたい。その結果、得られた結果が、今後の英語教師の養成、採用、研修、さらには効果的な習熟度別授業のあり方に何らかの示唆を与えることができれば幸いである。

## 1. 先行研究について

### 1.1 PM理論について

現在でも教師のリーダーシップを分析する際に多く用いられているのがこの理論である。

三隅(1978)らは、福岡市内の小学5年生の学級に入り2週間同じ学校生活を体験する中で、教師の行動を観察した。その結果、教師の専門性は、一般に専門科目の知識・技能の指導に関わる目標達成機能(Performance Function:P機能)と、教室経営に関わる集団維持機能(Maintenance Function:M機能)に分けられるという結果を導き出した。さらに三隅(1978)は教師のリーダーシップと児童の学校モラルとの関係も調査している。効果の高い順に、PM型(P機能、M機能とも大)pM型(M機能が大)Pm型(P機能が大)pm型(P機能、M機能とも小)ということが分かった。

この理論を用いて、縫部(2001)は日本語教師の指導性を論じ、4つの因子(①教職意識②教科の専門的知識③教授法の知識と能力④对人的配慮)を抽出している。因子①、④をM機能、因子②、③をP機能としているが、中条・縫部(1990)では、「日本語の成績が悪いと叱る」等の項目はP機能に属すもののM機能的な要素もあると指摘し、PM理論の限界を暗示している。最後に、学習者の自尊感情と教師のPM機能との関係を調べ、自尊感情が高い学習者ほど教師のM機能を重視しているという傾向が見られたと述べている。

同様に、小池(1988)は、高校生にアンケートを行い、英語教師に対する期待度を調べた。その結果から英語教師の指導性を論じ、2つの因子(①目標達成を指向した指導②集団維持を指向した指導)を抽出している。さらに生徒の進路希望や成績との関係を調べ、就職希望の高校生は、M機能を強く望み、進学希望の高校生はP機能を教師に強く望んでいるという。

### 1.2 理想的な英語教師について

保坂(2004a)は、高校生296名のデータを因子分析した結果、以下の6つの因子を抽出している。

- ①第1因子:受験学力がつく質の高い授業をする(F1)
- ②第2因子:知識・教養が豊かである(F2)
- ③第3因子:生徒の立場に立った授業をする(F3)
- ④第4因子:カウンセリング・マインドを持って生徒に接する(F4)
- ⑤第5因子:厳しい指導で英語力をつける(F5)
- ⑥第6因子:英語の高い運用能力を持つ(F6)

次に生徒の学年、性、英語の好感度(または成績)を独立変数に、因子を構成する質問項目の総点を従属変数にして3要因の分散分析を行った。その結果は以下のとおりである。

- ①第1因子:受験学力がつく質の高い授業をする  
成績の良い生徒の方が、受験学力のつく質の高い授業を望んでいることが明らかになった。また、男子生徒の中では英語の好きな生徒の方が、受験学力のつく質の高い授業を望んでいることがわかった。
- ②第2因子:知識・教養が豊かである  
これに関して有意差は見られなかった。
- ③第3因子:生徒の立場に立った授業をする  
2年生の男子生徒が、3年生の男子生徒に比べて、生徒の立場に立って授業する教師をもとめていることがわかった。
- ④第4因子:カウンセリング・マインドを持って生徒に接する  
成績の良い生徒の中では、3年生に比べ1・2年生の方がカウンセリング・マインドを教師に望んでいることが明らかになった。また、2年生においては成績の悪い生徒よりも普通か高い生徒の方がカウンセリング・マインドを持って接することができる教師を望んでいる傾向にあることもわかった。
- ⑤第5因子:厳しい指導で英語力をつける  
2年生に比べ3年生の方が厳しい指導を望む傾向にあることがわかった。
- ⑥第6因子:英語の高い運用能力を持つ  
英語が好きな生徒の方が、英語の運用力の高い

教師を好む傾向にあることがわかった。また、3年生では英語の成績の良い生徒の方が英語の運用能力の高い教師を好む傾向にあることもわかった。

保坂 (2004a) は、PM理論を用いて上記の6因子を分類しようとしているが、各因子に収束した質問項目を1つ1つ分析していくと必ずしもどちらかに分類することができるわけではないと述べている。

### 1.3 PM理論の検証

保坂 (2004b) は、上記で抽出した6因子に影響を与えている潜在因子を、共分散構造分析を用いて明らかにした。保坂 (2004b) は、6因子に共通の潜在因子を、1つずつ増やし6因子との関係をパス図で表した。その適合度を比べた結果、図1が最適な図であることが明らかにされた。これによると、6因子は、2つの潜在因子から影響を受けており、その潜在因子は内容的には三隅のいうP機能、M機能に極めて近いものであることが明らかにされた。図1からわかることは、普通科高校における生徒が期待する教師像は、大きくはP機能、M機能の2つに分けられるが、その構造は2者択一のものではなく、1つ1つの因子が複雑に両機能と関係があるということである。

本研究では、成績上位者と下位者の教師像の構造を共分散構造分析であきらかにし、最近多く導入されている習熟度別授業での教師の生徒への対応の仕方を模索するものである。

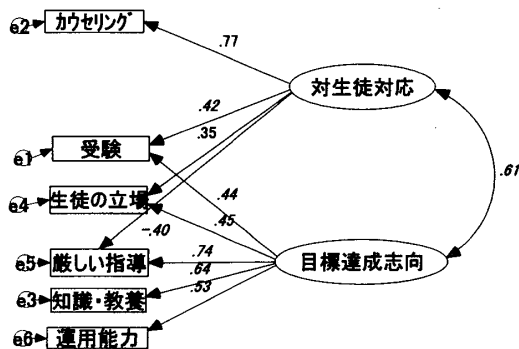


図1：生徒全体の考える理想的な教師像

## 2. 研究の目的

本研究の目的は以下のとおりである。

- ①成績上位者の考える理想的な英語教師像の構造を共分散構造分析を用いて明らかにする。
- ②成績下位者の考える理想的な英語教師像の構造を共分散構造分析を用いて明らかにする。
- ③上記の①、②を比較・検討することにより習熟度別授業における教師の生徒への対応の仕方について考える。

## 3. 研究方法

被調査者は、保坂 (2004a) と同様の山口県内のH高校2年生167名である。H高校は山口県の周南部位置し、95%以上の生徒が進学する進学校である。生徒の成績はセンター試験の平均点と同じ程度である。

被調査者の分類に用いた成績は、2002年度の英語IIの学年末試験の成績 (定期考査100点満点) である。これは1年間の定期考査の平均点であり、1年間の生徒の英語の成績を代表するものである。平均値は52.18点、標準偏差は17.75点、最高点は96点、最低点は16点であった。

その成績を平均点 (x)、標準偏差値 (s) をもとに各母数を考慮に入れ、概ね  $(x+s/2)$  以上を上位群57人 (96点～61点)、 $(x+s/2)$  未満を下位群52人 (42点～16点) に分けた。

つぎに、上位群57人の生徒の考える理想的な英語教師像を共分散構造分析を用いて分析した。手順は、保坂 (2004b) と同様に、まず、上記の6因子の各因子に収束した質問に対する回答値の合計をその因子得点とした。次に、潜在因子を1つ、2つ、3つと増やし、2つ以降は、順に考えられる組合せを考慮しパス図の作図を何回も試みた。モデルの評価には、カイ2乗検定、GFI、AGFIそしてAIC (赤池の情報量基準) を参考にした。豊田 (1992) は、カイ2乗検定やGFIによって採択するモデルの候補を選択し、AICが最小のモデルを採用するのがよいと述べているので、最終的な採択はそれに従った。

上記の分析を成績下位者のデータに関しても行った。

## 4. 結果とその考察

### 4.1 成績上位者の場合

成績上位者のデータを分析した結果、識別ができたモデルは、以下の3つであった。

尚、潜在変数 (latent variables) を以下、L1、L2と表記する。

表1：成績上位者のモデル

モデル	カイ2乗検定			GFI	AGFI	AIC
	カイ2乗値	自由度	確率			
A	11.917	7	0.103	0.931	0.794	39.92
B	10.539	6	0.104	0.941	0.792	40.53
C	19.319	6	0.004	0.902	0.655	49.32

まず、カイ2乗検定の結果、有意差が出た ( $p < .05$ ) モデルCは不適合とした。次に豊田他 (1992) に従ってGFI、AGFIを参考にAIC (赤池の情報量基準) の最小であるモデルAとモデルBを検討した。

両者とも適合度に関しては、一長一短があった。モ

デルAは潜在変数L1のF3に対する偏回帰係数が、標準化したにもかかわらず1.00を超えたので採用を控えた。この件に関しては、豊田(2000)は、理論的にはありえることで、不適解ではないが多重共線性が生じている可能性があるとして述べている。多重共線性の有無については観測変数と潜在変数との関係で微妙な問題が生じるので今回は採択を避け、最終的にはモデルBを採択することにした。

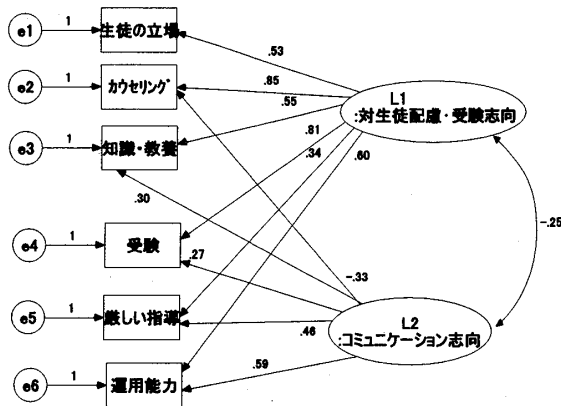


図2：成績上位者モデルB

モデルBから分かることは、教師像は2つの潜在因子から影響を受けているということである。L1は、F4(カウンセリング・マインド)とF1(受験)に対して、かなりの影響力を持っていることから「対生徒配慮・受験志向」と名づけた。もう1つのL2は、F6(運用能力)、F5(厳しい指導)に対する影響力が高い反面、L1に対しては負の相関があることから「コミュニケーション志向」と名づけることにした。

このパス図から、成績上位者の考える英語教師像に関して以下のことが明らかになった。

- ① 三隅の理論から言えば、潜在因子は、受験やコミュニケーションを志向とした目標達成機能に関するもののみが抽出された。ただ、それぞれの潜在変数には、集団維持機能的な側面も含まれている。成績上位者に関しては、目標を持って授業を行う中でクラスの維持も同時になされていると考えられる。
- ② 潜在因子「対生徒配慮・受験志向」はどの教師像にも影響を与えていることから成績上位者は何よりも受験に向けての実力養成を教師に期待するように思われる。
- ③ 潜在因子「コミュニケーション志向」がF3(生徒の立場)以外の因子に影響を与えていることを考慮すると、生徒の要望は受験と同時に英語のコミュニケーション能力向上を期待しており、それは全く別の活動(授業)の中でというよりも同じ

授業の中で生徒が期待しているものが異なっているように思われる。ただ、L1とL2の相関が負であることは、授業での活動は同じであっても、生徒の両者に対する意識は明確に区別されており、受験を期待する生徒はコミュニケーション能力向上に対する期待は低くその逆も言えるようである。

#### 4.2 成績下位者の場合

成績下位者のデータを分析した結果、識別ができたモデルは、以下の2つであった。

表2：成績下位者のモデル

モデル	χ <sup>2</sup> 乗検定			GFI	AGFI	AIC
	χ <sup>2</sup> 乗値	自由度	確率			
A	12.007	9	0.213	0.935	0.847	36.01
B	10.443	8	0.235	0.941	0.846	36.44

今回は豊田他(1992)に従って、採用するモデルを検討した。モデルAは、GFIはモデルBよりも若干低いが、AGFIはモデルAの方が高い。最終的にはAIC(赤池の情報量基準)が低いモデルAを採用することにした。

モデルAの潜在変数はL1のみの1つである。F3(生徒の立場)、F1(受験)に対する影響がかなり高い一方で、F5(厳しい指導)に対しては影響力は低い。F4(カウンセリング)、F2(知識・教養)に対しても影響力はそれなりに高いという状況から判断して、L1を「学力向上・対生徒配慮」と名付けた。

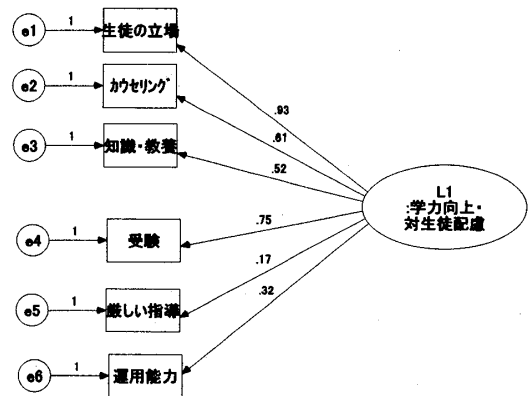


図3：成績下位者モデルA

このパス図から、成績下位者の考える英語教師像に関して以下のことが明らかになった。

- ① 「学力向上・対生徒配慮」という1つの潜在因子から6つの観測因子に影響を示す矢印が向かっているということは、成績下位者に対しては、1つ1つ観測変数名の示す通りの明確な指示が期待されているようである。
- ② 潜在因子L1の内容は、それぞれの偏回帰係数の大きさの違いから考慮すれば、成績下位者は、生徒の立場に立って分かりやすく教え、受験に対応

できるだけ英語の学力が向上することを教師に期待しているようである。

### 4.3 成績上位者と下位者の比較

上記の4.1と4.2の調査結果の比較から、成績上位者と下位者の求める英語教師像が異なっていることが明らかにされた。成績上位者は、英語教師に対して、主として受験やコミュニケーション能力向上といった目標達成機能を求めていることが明らかになった。一方、下位者は、生徒への配慮に気を遣いながらも学力を向上させて欲しいということを英語教師に期待しているようであった。なかでも影響力が強いのは、生徒の立場に立った授業をするという因子である。基礎学力の向上を中心に英語力がつく授業を期待してはいるが、成績上位者と違い厳しい指導は期待していないようである。一人一人を大切にしたいわかりやすい授業をする能力を成績下位者は教師に求めているようである。

## 5. 研究成果と今後の課題

今回の研究で明らかにされたことは、成績の違いによって求める教師像が異なるということである。一般的には私たちは、学力の低い生徒には易しい教材を用いわかりやすく教えようとするが、本研究では学習者の意識はそう単純ではないことが明らかにされた。

本研究で明らかにされたことを、PM理論の検証、生徒の学力差による検証という観点からまとめると以下ようになる。

- ①生徒全体の傾向としては、潜在変数であるP機能的因子、M機能的因子が個々ではなく複雑に絡みあった形で影響を与えている。それに対して、成績上位者の場合は、主としてP機能的な要素の強い指導が、成績下位者の場合は、P機能的要素とM機能的要素がはっきりと区別された指導力が期待されているようである。
- ②「対生徒配慮」に関しては、興味深い結果となった。生徒全体では、潜在因子の独立した1つとして抽出されたが、成績上位者の場合は、受験因子と一体化したのとして、成績下位者の場合は唯一の潜在因子のかなりの重要な中心的な要素として抽出された。
- ③昨今話題にされる教師の英語運用能力に関しては、期待度が高いのは、成績上位者である。成績上位者の場合、コミュニケーション志向の強い生徒は勿論であるが、受験志向の強い生徒においても教師の英語運用能力に対してかなり高い期待が

寄せられている。

- ④教師の知識・教養に関しては、三隅(1978)は授業での緊張緩和因子の性格が強いとしているが、本研究ではむしろ受験や英語のコミュニケーション能力向上志向の授業の質を高めるためのものといった目標達成機能的な側面が強いようである。

今後の課題としては以下のことが考えられる。

本研究では、教師の指導力を目標達成機能、集団維持機能という側面から分析したが、実際には教師の指導がそのまま成績の向上に直接作用するとは思われない。現実の教育現場では、教師の指導力は生徒の動機を高めたり、英語学習方略をより効果的なものにするを通じて最終的に成績に反映するものであるように思われる。

従って、上記の動機や学習方略等の要因と、教師の指導力、成績との関係を明らかにすることによって、学校現場で実際に行われている教師の指導力の解明に迫りたい。そして最終的には最近になって急に導入が盛んとなった習熟度別授業に対する教師の指導のあり方を提言できればと思っている。

教師の資質、指導力が問題とされる中で、実証的な研究は今始まったばかりである。今後の多くの研究者による追研究、新しい角度からの研究が望まれる。

### 【参考文献】

- 中條和光・縫部義憲.(1990).「日本語教育における情意的・社会的変数に関する調査」『第2言語としての日本語の教授・学習過程の研究』(平成元年度科学研究費助成金補助金一般研究(B)研究成果報告書, 研究代表者細田和雅), 77-103.
- Giles, H., & Hildebrandt, N. (1980). The English language in Japan: Social psychological perspective. *JALT Journal* 2, 62-87.
- 保坂芳男.(2004a).「理想的な英語教師像に関する実証的な研究—普通科高校における生徒へのアンケートをもとにして」『日本教科教育学会誌』第26巻第4号, 9-18.
- 保坂芳男.(2004b).「高校英語教師の資質に関する実証的研究:PM理論の検証」『日本教科教育学会全国大会』発表原稿.
- 猪井新一.(2002).「学習者に望ましい英語教師像」『北海道教育大学紀要(教育科学編)』第53巻, 1号, 39-46.
- 金谷憲編.(1995).『英語教育研究リサーチ②英語教師論』河原社.
- 小池直己.(1988).『英語教育の実践的研究』南雲堂.

Koster, C. J. (1986). English FLES in the Netherlands:  
How good must a teacher be? *Modern Language  
Journal*, 70, 1, 8-12.  
三隅二不二. (1978). 『リーダーシップ行動の科学』  
有斐閣.  
縫部義憲. (2001). 『日本語教師のための外国語教育学』  
風間書房.  
Nunan, D. (1991). *Language teaching methodology*.

Cambridge University Press.  
佐藤学. (2004). 『習熟度別指導の何が問題か』岩波ブッ  
ケットNo.612. 岩波書店.  
豊田秀樹・前田忠彦・柳井晴夫. (1992). 『原因をさ  
ぐる統計学：共分散構造分析入門』講談社.  
豊田秀樹. (2000). 『共分散構造分析 [応用編] - 構  
造方程式モデリング』朝倉書店.  
(主任指導教官：小篠敏明)